



英語発音表記変遷史--戦後検定教科書の発音表記の 観点から--

著者	松崎 徹
雑誌名	筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報
号	25
ページ	109-125
発行年	0014-08-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1219/00000451/

英語発音表記変遷史

— 戦後検定教科書の発音表記の観点から —

松 崎 徹

How Have Japanese Transcribed English Words? : Some Findings from Post-War Middle School English Textbooks Approved by the Ministry of Education

Toru MATSUZAKI

0. はじめに

日本全国の公立中学校で現在採択されている検定教科書は2011（平成23）年度文部科学省検定済の6種（*Sunshine*、*New Crown*、*New Horizon*、*One World*、*Total English*、*Columbus 21*）であるが、これらすべての教科書に共通する特徴としてひとつ指摘できるのは、単語の発音表記が現代アメリカ英語の標準発音（General American「一般アメリカ語」、以下 GA）に基づいてなされているという事実であろう。一例を挙げれば、car という単語はあまねく GA の特徴であるそり舌接近音 [ɹ] を含む表記 [kɑ:ɹ] となっている。発音表記において検定教科書が GA に基盤をおくこのような傾向は、高梨・大村（1985）や伊村（2003）らも指摘するように、第2次世界大戦での敗戦を受けて、教育界が戦前のイギリス英語一辺倒主義から180度舵を切るような形でアメリカ英語重視へと転換していった事実を現代もなお色濃く反映している証と言えよう。

しかしながら、戦後に発行された検定教科書を詳細に検証してみると、戦後ただちに GA に準拠した表記法が一斉に採用されたわけではなく、むしろ戦後約20年間にわたる期間は car のように ar の文字列を含む単語は現代イギリス英語の標準発音（Received Pronunciation「容認発音」、以下 RP）の非そり舌接近音を示す [ɑ:] で表記されるのが普通であった。さらにこの RP に特有の発音表記法に限って言えば、三省堂発行の *New Crown* シリーズにおいて現行の検定年度の直前にあたる2005（平成17）年度の検定教科書まで使用され続けていた。このような事例は、「戦前の英語教育はイギリス英語一辺倒、戦後の英語教育はアメリカ英語一辺倒」という通念（高梨・

大村 1985、稲村 1986) を今一度検証しなおすことの意義を提起していると思なせるであろう。

本論では、第2次世界大戦後に発行された中学校用検定英語教科書を精査し、特に戦後ほどなくして日本の学校教育現場にイギリス英語に代わって流入してきたとされるアメリカ英語が、語彙・語法の面だけでなく発音表記の点でもその影響力を色濃く映し出していることの例証を試みる。その一方で、こうしたイギリス英語からアメリカ英語への転換は、戦前・戦後という時代の急転回に歩調を合わせるように唐突に起きた現象ではなく、むしろ明治時代初期のころから教科書の編著者らが長い年月をかけて試行錯誤を重ねつつ築き上げてきた、我が国の英語教育の一つの伝統であることも本論で示すことにする。

1. 英語検定教科書発行の歩み

明治期から現代に至るまでの公立教育機関での英語教育史に関してはこれまで多くの研究がなされてきているが(高梨・大村 1985、出来 1994、伊村 2003、斎藤 2007、江利川 2006、2008)、それらの研究を支える重要な基礎資料となるのが教育現場で実際に使用されてきた検定教科書である。その詳細について考察する前に、文部省による教科書検定が開始されるまでの期間、すなわち明治政府誕生から約20年に及ぶ時期には、主に舶来本と呼ばれる海外から輸入したリーダー、それから舶来本リーダーを日本で再製した翻刻本が英語教育の現場で幅広く使用されていた事実に言及する必要がある。この種のリーダーの中でも特に著名なのが『ウィルソン・リーダー』(Marcius Willson, *The Reader of the School and Family Series*) と『ナショナル・リーダー』(A. S. Barnes, *Barnes' New National Readers*) で、どちらも日本に輸入される以前はアメリカの小学校で用いられていた教科書であったが、輸入後は舶来本・翻刻本併せて日本全国の旧制中学校で広く使用された。とりわけ、『ナショナル・リーダー』の人気は相当高かったようで、東京高等師範の附属中学校では明治20年代後半から大正時代前期まで長年にわたって使用された記録が残っているという(伊村 2003: 129)。

日本最初の教科書検定は1886(明治19)年発令の検定条例に基づいて同年実施され、翌1887(明治20)年に検定済教科書が初めて発行された。英語の検定教科書に関しては、初年度は10種にも満たない数であったが、その後3年間では30種以上出版される伸びを見せた。一時期には検定教科書の発行が途絶えた年度があったりはしたものの、第2次世界大戦以前までの期間に旧制の小学校・中学校用に発行された検定英語教科書は、江利川(2006: 23)によると実に2,200種を超える数(そのほとんどが英語の教科書)に上っている。これらの教科書を言語(支那語、独語、仏語)および分野(会話、作文、文法、読本)に区分して、年度ごとの発行種別数をグラフで表したのが次の頁の図である。とりわけ顕著なのが関東大震災後の大正末期から5種選定直前の昭和前期にかけての検定教科書の数の多さであり、1930(昭和5)年と1935(昭和10)年にはそれぞれ単年度で100種を超える検定教科書が発行されている事実は注目に値する。

第2次世界大戦時に中断していた教科書検定制度は、1947(昭和22)年に発布・施行された「教

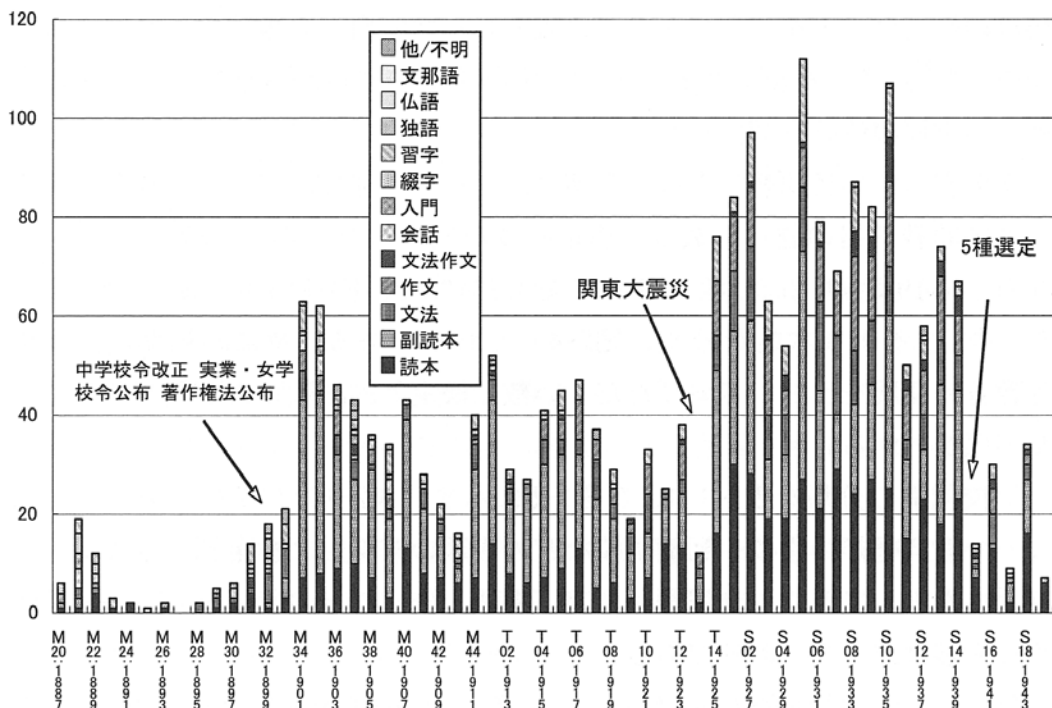


図 外国語教科書検定認可数の変遷（1887-1944年）（江利川 2006：24より転記）

育基本法」と「学校教育法」に基づく新制中学校の発足と歩調を合わせるように復活への道筋を辿り始める。翌1948（昭和23）年2月3日に文部省告示として「教科用図書検定要領」が発表され、続いて同年4月30日には今度は文部省令によって「教科用図書検定規則」が公表された。そして、同年8月に我が国戦後初となる文部省による検定が実施された。翌1949（昭和24）年に民間の出版社5社からそれぞれ1種類ずつ合計5種の検定教科書（*Jack and Betty*、*The Gate to the World*、*The New Vista English Readers*、*The Revised Standard English Readers*、*Tsuda New Readers*）が発行され、新制中学校の現場での使用が開始された。1949年以降も中学校用検定英語教科書は年々その種類数を伸ばしていき、1952（昭和27）年度には26種類もの教科書が発行され、種別数に関してはピークを迎えることになる。その後は、学校単位ではなく広域の地区ブロック単位で同一の教科書を採用するという広域採択制度が1963（昭和38）年度に導入されたり、1972（昭和47）年度からは1社につき1種類の教科書しか出版できなくなったりなどの影響で教科書の種類が減少の一途をたどっていくこととなり、1975（昭和50）年度には戦後最低となる4種類にまで落ち込むこととなった。それでも、江利川（2008：133）によると2006（平成18）年度までに戦後の中学校用検定英語教科書は149種類発行されており、この数字に2011（平成23）年度検定済みの6種類を加えると、現在までに155種類もの英語検定教科書が発行されたことになる。

2. 教育現場におけるイギリス英語重視の傾向（第2次世界大戦以前）

明治政府が発足した19世紀後半は、イギリスが帝国主義にもとづく植民地拡大を目指していた時期と重なり、欧米列強中核国としてのイギリスの存在感は日本にとっても絶対的なものがあった。また、イギリスは当時すでにアジア・アフリカ・オセアニアを中心に世界各地域を植民していたこともあり、もともとはイギリス人固有の母語であった英語は次第に異民族間のコミュニケーションの役割を担う国際語としての地位を築きつつあった。そのような国際情勢の中で、長期にわたる鎖国政策から脱却し、富国強兵を前面に打ち出していわゆる「脱亜入欧」を目指していた日本は、イギリスを筆頭とする西欧諸国から積極的に先進技術・文化・思想等を取り入れることを国家的急務と考えていた。そうした過程で、その媒体手段となる英語習得の必要性も当然ながら痛切に認識されていたことであろう¹。

そうした世情に敏感に反応して、国は公立の教育機関における英語教育の充実を最重要課題の一つとして位置づけ、明治新政府樹立直後から幾度かに及ぶ教育制度改革を実行していくことになる。まず1872（明治5）年発布の学制によって旧制中学校に「外国語学」が置かれることが決まり、公立の教育現場での英語教育が事実上開始されることになる（江利川 2006：17）。さらに1873（明治6）年には我が国初の官立の外国語学校（同年、東京外国語学校に改名）が創立されると、翌1874（明治7）年にはさらに6つの外国語学校が創設され、同年内に東京外国語学校と併せてそれらはすべて英語学校と改称した（斎藤 2007：8）。明治初期のころの政府によるこのような新制度導入の動きの背景には、中等および高等教育機関での英語教育の急務に対する強い認識が広がっていたことを如実に物語るものであろう。

英語教育に対する国家的意識の高まりを見せた明治時代初期から中期にかけて、教育機関で実際に使用された教科書が先で触れた『ウィルソン・リーダー』や『ナショナル・リーダー』に代表される舶来本およびその復刻本であった。これらのリーダー本のほとんどがアメリカで発行されたものであったため、その普及とともに日本の英語教育も語法や発音法などの点においてアメリカ英語からの影響を少なからず受けることとなる（大村喜吉他編『英語教育史資料第3巻』p. 4）。すなわち、我が国の英語教育黎明期においては、当時七つの海を支配するほどの国力を誇った大英帝国の英語が規範となるのではなく、教科書の発行および輸入元であったアメリカの英語がむしろ教育現場に浸透していくという興味深い現象が起きることとなった。

しかしながら、舶来本・復刻本が次第に教育現場から姿を消し始めた明治中期から後期にかけて、日本の対外情勢にいくつかの大きな転機が訪れる。まず1905（明治38）年の日露戦争勝利によって国力が高まりを見せ、国家の威信も高揚していく。さらに、1902（明治35）年にすでに締結していた日英同盟により欧米列強の一員としての意識が年を追うごとに強まっていく。そのような情勢の中で、同盟国たるイギリスの国語、すなわち英語を学ぶことの重要性が再認識されることになり、とりわけ大正期から昭和期にかけての教育界では同盟国意識を背景にしながらイギリス英語をその規範とする傾向が一貫して続いていくことになる。

国家レベルでの日英両国の関係がより深まりつつあったこの時期、英語教育界でもイギリス英語の地位をさらに高める一つの画期的な動きが見られた。すなわち、1922（大正11）年文部省からの招聘により実現したロンドン大学の音声学者ハロルド・エドワード・パーマー（Harold Edward Palmer, 1877-1949）の来日である。パーマーは翌1923（大正12）年に英語教授研究所を創立し、1936（昭和11）年に帰国するまでの日本滞在14年間にわたり、研究所を拠点に日本各地で講演や模範授業をおこない「オーラル・メソッド」（Oral Method）による英語教授法を啓蒙することに専念した。パーマーのこうした地道な努力が英語教育関係者に与えた影響は大きく、「オーラル・メソッド」の教授法が教育現場で一大ブームとなるなかで、パーマーの出身地であるロンドンの英語を正統派の英語として模範にすべきであるという気運も同時に高まっていった。さらに、パーマーが師と仰ぐダニエル・ジョーンズ（Daniel Jones, 1881-1967）による2著作 *An English Pronouncing Dictionary*（1917）と *An Outline of English Phonetics*（1918）を通じてイングランド南部パブリックスクールでの標準的発音すなわち RP が日本で急速な普及を見せたため、英語教育関係者がさらにイギリス英語に傾倒していくこととなった。またこれと並行して、1924（大正13）年にアメリカで排日移民法が成立し、それ以降排日運動が高まっていくなかで、アメリカ英語は逆に敬遠されていったことも見逃せない事実である。

3. 教育現場におけるアメリカ英語の浸透（第2次世界大戦以降）

第2次世界大戦中はいわゆる鬼畜米英とも呼ばれ、日本が敵対心をむき出しにする対象であったアメリカは、終戦後にアメリカ主導で推進された民主化政策のもとでは、忌み嫌う相手どころか正反対に日本人に賛美される国へ文字通り180度転換した。終戦直後からGHQによる占領政策が始まり、それに伴うアメリカ進駐軍の日本在留によって、アメリカ人のみならず彼らの社会および文化などが日本人にとって俄然身近なものに感じられるようになった。また、進駐軍兵士が話す英語が巷にあふれ出すと、戦時中まで日本庶民が一般に抱いていた英語という言語に対する偏見もたちまち霧散してしまったと見られ、それまでの抑圧時代の反動でもあるかのような尋常ならざる英語ブームが訪れた。英会話の看板が街のあちらこちらに掲げられ、本屋では英会話の本が飛ぶように売れ²、ラジオでは平川唯一氏の「英語会話」の放送が1946（昭和21）年の2月にスタートし「カムカム英語」としてリスナーからの多大な支持を得た。このように終戦直後の日本には、それまでに一度も経験したことがないような英語熱が都市部を中心に日本中に充満していた。

教育現場においても、イギリス英語一辺倒であった第2次世界大戦以前とは異なり、戦後はアメリカ英語の波が日本の英語教育の現場に一気に押し寄せてきた。教育現場へのアメリカ英語の流入ぶりがいかに激しいものであったかは、高梨・大村（1985：246）の以下の描写に明瞭に示されている。

学校教育にもアメリカ英語が入ってきた。戦前にイギリス英語で鍛えられた英語教師は、ホット (hot) をハット、リトル (little) をリル、ウォッターユー (What are you?) をワラユーと発音しなければ通じない《街の英語》に当惑した。ラーン (learn)、バード (bird) などであール (r) 音をひびかせる発音は聞きづらくもあり、今さら覚えようとしても口が動かない。(中略) 昭和22年に文部省の中学校リーダー『レッツラーンイングリッシュ』(*Let's Learn English*)が出た。Thank you. に対する受け答えが、Don't mention it. (どういたしまして)ではなくて、You are welcome. と言わなければならないことになった。このようにしてイギリス英語はアメリカ英語にとって代わられることになった(以下略)

文字通り一夜のうちに軍国主義から民主主義社会への転換を余儀なくされた日本は、学校教育の現場においても、昨日とは手のひらを返したような教育内容を教員が教え子たちに課さざるをえなかったことは世に知られたことであるが、イギリス英語からアメリカ英語への切り替えも多くの英語教員の頭を悩ませたことは疑いのないところである。

このようなアメリカ英語の新制中学校への浸透ぶりがある意味象徴するのが、1948(昭和23)年の文部省による戦後初の検定実施から登場する *Jack and Betty* シリーズの抜群の人気度である。初採用の1949(昭和24)年こそ全国の中学での採択率が4割にとどまったものの、次年度1950(昭和25)年は実に8割まで大幅に数字を伸ばし、その後 *New Jack and Betty*、*Revised Jack and Betty* と改訂を重ねても常時全国の中学校での採択率が過半数を超える勢いを維持し続けた(稲村 1986、伊村 2003)。このきわめて高い採択率の背景にあるのは、第2世界大戦の敗戦直後から日本国民にあまねく共有されていた親米感情であった。江利川(2008:133)によると、1949(昭和24)年に実施された時事通信社の世論調査では実に62%もの日本人がアメリカを「もっとも好きな国」として挙げている。こうした国民感情に後押しされて、舞台設定がアメリカであり、登場人物もアメリカ人のみだった *Jack and Betty* シリーズは、その教科書で英語を学ぶ中学生に未来への新たな夢と希望を与えるのに格好の教材として教育現場の教員たちに広く受け入れられたものと考えられる。後述するように、*Jack and Betty* シリーズの影響によって検定教科書すべてがアメリカ英語一色になったわけでは決してないものの、少なくともこのシリーズの高い受容度が現代の検定教科書に見られるアメリカ英語重視の道筋をつけたことには異論をはさむ余地がないであろう。

4. 英語発音表記法の変遷

英語がその他のいかなる言語とも同様に音声をその基盤において成り立っていることは明白な事実であり、教育機関での英語の授業を展開する際においても、文字体系と並んで音韻体系も生徒らにその学習の機会を与えなければならないのは当然のことである。とりわけ、日本語の音韻

体系と比較してみると、英語の音韻体系は複雑さの度合いも高く、初学者には特にその学習に大きな困難が伴うものである。このような事情を背景に、英語音声の表記に関しては我が国の英語教育の黎明期からさまざまな試みがなされてきている。

明治初期には主に米国からの舶来本およびその複製本が教育現場の市場を占めていた関係で、当時の検定教科書の発音表記に関しては Webster 式が主流ではあった。Webster 式とは、その名が示す通り18世紀後半から19世紀前半にかけて主として辞書編纂の分野で活躍したアメリカ人ノア・ウェブスター (Noah Webster, 1758-1843) が自ら編纂した辞書 *An American Dictionary of the English Language* の中で初めて使用した発音表記法にその起源を発する。この発音表記の特徴は、同一文字の音価の差異を示すためにあえて別個に表記を設けることをせず、文字に直接符号を付けることによりその目的を達成することにある。Webster の辞書の発売後、同氏による著作 *The Spelling Book* にもこの発音表記法が取り入れられ、この本が明治初期に日本でも広く読まれたことで Webster 式発音表記法の教育関係者への知名度が上がった。また、同じく明治時代を代表するリーダー『ナショナル・リーダー』でもこの Webster 式の発音表記を用いていたことでその知名度はさらに高まることとなった。

明治期全般にわたり Webster 式による発音表記が主流であった時代に続き、大正期にはそれまでとは全く趣を異にする斬新な発音表記法が日本にもたらされることになる。すなわち、1888 (明治22) 年に国際音声学会によって制定された International Phonetic Alphabet (国際音標文字、以下 IPA) が、大正中期ごろには先述のジョーンズの発音辞典などを通して日本国内に広がっていった。おりしも大正期の英語教育は音声中心主義の流れの中にあり (斎藤2007: 71)、RP に忠実に準拠したジョーンズ式 IPA が検定教科書においてもあまねく採用され、結果的に大正期から第2次世界大戦前の昭和前期まで発音表記に関してはイギリス英語一辺倒という傾向になっていった。

しかしながら、先述のように第2次世界大戦での敗戦を受けて日本の英語教育現場にアメリカ英語が浸透してくると、文法・語法のみならず発音に関してもそれに即した表記法の必要に迫られることになった。ただし、いわゆる IPA に基盤を置くジョーンズ式の発音表記法は確かに RP を正確に記述するうえで優れていたものの、GA 特有の発音を表記するうえではいささか困難を伴うことになった³。特に GA 音を代表するとも言える母音字の後に続いて発音される R は、通常 RP では表記されない音であるため、戦前の英語教科書においてもこの音を記した例がなかった。戦後になってからは、例えば bird などの R に関しては IPA におけるそり舌母音 (retroflex vowel) [ɹ] が散発的に一部の教科書で採用されたりしたこともあったが、後述するように1965 (昭和40) 年検定の開隆堂発行の教科書を皮切りに、それ以降徐々に [r] を付す方式が他の出版社へと広がっていった⁴。すなわち、終戦後しばらくの期間は、当時の教育関係者側の混乱ぶりを反映してか、一方では後述するように GA 式の発音表記法が指導要領において推奨されてはいるものの、現実にはその転換が必ずしも潤滑には進まなかった様子が窺える⁵。

このように戦後の教育現場でアメリカ英語に重きが置かれるようになった背景として考えられ

るのが、第2次世界大戦直後に見られた我が国の一連の教育制度改革の動きである。敗戦の翌年にあたる1946年（昭和21）年にアメリカから教育使節団（The United States Education Mission to Japan）を迎えた日本は、使節団の報告書に基づきただちに教科書課程改正準備委員会を発足し教育制度の改革に着手した。翌1947年（昭和22年）には戦後初の指導要領「学習指導要領 英語編〔試案〕」（中学・高校共通）が文部省より発行された。この指導要領では、「英語で考える習慣を作ること」、「英語の聴き方と話し方を学ぶこと」、「英語の読み方と書き方を学ぶこと」などが力説され、パーマーを主管とした英語研究所で戦前から提唱されていた理想的な英語学習法がほぼそのまま踏襲されたものとなっている。

とりわけ、本論の主旨に関わる箇所として注目されるのが、RP と GA の相違について触れた附録「発音について」の冒頭の記述である。

イギリスの音とアメリカの音との相違点に注意し、アメリカの発音に習熟されたい。

（〔附録 発音について 二〕）

学習指導要領に記載されたこの文言がそれ以降発行された検定教科書の発音表記法に対してどの程度の拘束力を持つものであったかについては詳細な検証が必要ではあろうが、戦後の混乱期に、英語教育の将来向かうべき方向性を国として示したともいえる学習指導要領が教育現場に及ぼした影響力は小さくはなかったと考えるのが自然であろう。そうした背景を考慮すると、上記の「アメリカの発音に習熟されたい」と記された一文が現場教師の発音指導方針のみならず、検定教科書を編集・発行する出版社の発音表記法にも何らかの影響を与え、その結果の一つとして昭和40年以降の検定教科書にほぼ一貫して観察される GA 式発音表記重視の傾向へとつながる礎を築いたと言えるのではないだろうか⁶。

5. RP式発音とGA式発音の相違点

本論では以下戦後発行された中学校用検定英語教科書を精査し、発音表記法の変遷を辿っていくのであるが、それに先立ち RP 式発音と GA 式発音に関して特に顕著とされる相違点を列挙してみる（cf. 竹林 1988）。

1. 強勢のある長母音でのそり舌接近音 [ɹ] の有無

	RP 式	vs.	GA 式
arm	[ɑ:m]		[ɑ:ɹm]
bird	[bɜ:d]		[bɜ:ɹd]
form	[fɔ:m]		[fɔ:ɹm]

2. RP 式「平舌の a」(flat a) vs. GA 式「開いた a」(broad a)

	RP 式		GA 式
ask	[ɑ:sk]	vs.	[æsk]
class	[klɑ:s]	vs.	[klæ:s]
fast	[fɑ:st]	vs.	[fæst]

3. RP 式「円唇の o」(rounded o) vs. GA 式「非円唇の o」(unrounded o)

	RP 式		GA 式
ox	[ɔks]	vs.	[aks]
hot	[hɔt]	vs.	[hat]
rock	[rɔk]	vs.	[rak]

両方式のこうした発音の相違を認識したうえで、民間の出版業界が英語教科書作成時に常に抱いてきたであろう懸案の一つに、発音表記法として RP 式・GA 式いずれの方式を選択するかという問題があった。もし仮に先で見たような第 2 次世界大戦直後の米語ブームが、進駐軍兵士たちが実際に話す英語を日本人が耳にすることで触発されてのものであるとするならば、教科書出版社も発音表記にはとりわけ敏感に反応する形で GA 式に直ちに転換したと考えるのが普通であろう。事実、終戦の翌々年発表の「学習指導要領 英語編〔試案〕」の附録では教育現場での GA 式発音の積極的な指導を促しているのはすでに述べた通りである。以上のような背景を踏まえながら、以下本論では第 2 次世界大戦後に発行された中学校用英語検定教科書を精査し、年代とともに揺れ動く RP 式と GA 式の発音表記の相関関係を探っていくことにする。

6. 調査資料および調査結果

第 2 次世界大戦以降に発行された中学英語検定教科書のうち、本論文では下記の条件を満たしたものに限り調査をおこなった。

1. 現行の検定教科書を発行している出版社 6 社：開隆堂・三省堂・東京書籍・光村図書・学校図書・教育出版
2. 現行では検定教科書発行してなくても、過去において 10 回以上の検定を受けている出版社 1 社：中教出版

まず現行の出版社 6 社に限定することで、先に挙げた 6 種の教科書とそれらの前身となるシリーズを遡って発音表記法を調査した⁷。また、中教出版は現行では検定教科書を発行していないものの、1953（昭和 28）年に初めて検定を受けた *Everyday English* が 1996（平成 8）年まで 13 回にわたり同一シリーズで検定を受け続けたのを考慮して今回の調査に加えた。それにより以下の 9 種のシリーズを今回の調査対象とした。

Jack and Betty (=J&B) (開隆堂)
New Prince Readers (=NPR) (開隆堂)
Sunshine English Course (SEC) (開隆堂)
Crown English Series (=CES) (三省堂)
(New) Everyday English (=N)EE (中教出版)
New Horizon (=NH) (東京書籍)
One World (=OW) (教育出版)
Columbus (=CL) (光村図書)
Total English (=TE) (学校図書)

前節で挙げた「強勢のある長母音でのそり舌接近音 [ɹ] の有無」に関して、発音表記法を年代順に調査した結果を表1～3の一覧で示す（表中の * は検定教科書の発行がないこと、- は当該年度の新規の検定は受けずに従来の検定教科書の発行が継続されたこと、N/A は検定教科書の発行はされたものの発音表記が一切用いられていないことをそれぞれ示している）。

教科書名 検定年	<i>J&B</i>	<i>NPR</i>	<i>SEC</i>	<i>(N)EE</i>	<i>CES</i>	<i>NH</i>	<i>OW</i>	<i>CL</i>	<i>TE</i>
昭和 23	N/A	*	*	*	*	*	*	*	*
昭和 25	[ɑ:]	*	*	*	*	*	*	*	*
昭和 26	[ɑ:]	*	*	*	*	*	*	*	*
昭和 28	-	*	*	[ɑ:]	*	*	*	*	*
昭和 30	[ɑ:]	*	*	-	*	*	*	*	*
昭和 31	-	*	*	[ɑ:]	*	*	*	*	*
昭和 36	-	[ɑ:]	*	[ɑ:]	[ɑ:]	*	*	*	*
昭和 40	[ɑ:ɹ]	[ɑ:ɹ]	*	[ɑ:]	[ɑ:]	[ɑ:]	*	*	*
昭和 43	*	[ɑ:ɹ]	*	[ɑ:ɹ]	[ɑ:]	[ɑ:]	*	*	*
昭和 46	*	[ɑ:ɹ]	*	[ɑ:ɹ]	[ɑ:ɹ]	[ɑ:]	*	*	*
昭和 49	*	[ɑ:ɹ]	*	[ɑ:ɹ]	[ɑ:ɹ]	[ɑ:]	*	*	*
昭和 52	*	[ɑ:ɹ]	*	[ɑ:ɹ]	[ɑ:]	[ɑ:]	*	*	*
昭和 55	*	[ɑ:ɹ]	*	[ɑ:ɹ]	[ɑ:]	[ɑ:]	*	*	*
昭和 58	*	[ɑ:ɹ]	*	[ɑ:ɹ]	[ɑ:]	[ɑ:]	*	*	*
昭和 61	*	*	[ɑ:ɹ]	[ɑ:ɹ]	[ɑ:]	[ɑ:]	[ɑ:ɹ]	*	*
平成 元	*	*	[ɑ:ɹ]	[ɑ:ɹ]	[ɑ:]	[ɑ:]	[ɑ:ɹ]	*	*
平成 4	*	*	[ɑ:ɹ]	[ɑ:ɹ]	[ɑ:]	[ɑ:]	[ɑ:ɹ]	[ɑɤ ɑ:]	*

平成 8	*	*	[a:r]	[a:r]	[a:]	[a:r]	[a:r]	[a:r]	[a:r]
平成 13	*	*	[a:r]	*	[a:]	[a:r]	[a:r]	[a:r]	[a:r]
平成 17	*	*	[a:r]	*	[a:]	[a:r]	[a:r]	[a:r]	[a:r]
平成 23	*	*	[a:r]	*	[a:r]	[a:r]	[a:r]	[a:r]	[a:r]

表 1 強勢のある ar の発音表記 (例 car)

教科書名 検定年	<i>J&B</i>	<i>NPR</i>	<i>SEC</i>	<i>(N)EE</i>	<i>CES</i>	<i>NH</i>	<i>OW</i>	<i>CL</i>	<i>TE</i>
昭和 23	N/A	*	*	*	*	*	*	*	*
昭和 25	[ɔ:]	*	*	*	*	*	*	*	*
昭和 26	[ɔ:]	*	*	*	*	*	*	*	*
昭和 28	-	*	*	[ɔ:]	*	*	*	*	*
昭和 30	[ɔ:]	*	*	-	*	*	*	*	*
昭和 31	-	*	*	[ɔ:]	*	*	*	*	*
昭和 36	-	[ɔ:]	*	[ɔ:]	[ɔ:]	*	*	*	*
昭和 40	[ɔ:r]	[ɔ:r]	*	[ɔ:]	[ɔ:]	[ɔ:]	*	*	*
昭和 43	*	[ɔ:r]	*	[ɔ:r]	[ɔ:]	[ɔ:]	*	*	*
昭和 46	*	[ɔ:r]	*	[ɔ:r]	[ɔ:r]	[ɔ:]	*	*	*
昭和 49	*	[ɔ:r]	*	[ɔ:r]	[ɔ:r]	[ɔ:]	*	*	*
昭和 52	*	[ɔ:r]	*	[ɔ:r]	[ɔ:]	[ɔ:]	*	*	*
昭和 55	*	[ɔ:r]	*	[ɔ:r]	[ɔ:]	[ɔ:]	*	*	*
昭和 58	*	[ɔ:r]	*	[ɔ:r]	[ɔ:]	[ɔ:]	*	*	*
昭和 61	*	*	[ɔ:r]	[ɔ:r]	[ɔ:]	[ɔ:]	[ɔ:r]	*	*
平成 元	*	*	[ɔ:r]	[ɔ:r]	[ɔ:]	[ɔ:]	[ɔ:r]	*	*
平成 4	*	*	[ɔ:r]	[ɔ:r]	[ɔ:]	[ɔ:]	[ɔ:r]	[ɔə ɔ:]	*
平成 8	*	*	[ɔ:r]	[ɔ:r]	[ɔ:]	[ɔ:r]	[ɔ:r]	[ɔ:r]	[ɔ:r]
平成 13	*	*	[ɔ:r]	*	[ɔ:]	[ɔ:r]	[ɔ:r]	[ɔ:r]	[ɔ:r]
平成 17	*	*	[ɔ:r]	*	[ɔ:]	[ɔ:r]	[ɔ:r]	[ɔ:r]	[ɔ:r]
平成 23	*	*	[ɔ:r]	*	[ɔ:r]	[ɔ:r]	[ɔ:r]	[ɔ:r]	[ɔ:r]

表 2 強勢のある or の発音表記 (例 short)

教科書名 検定年	<i>J&B</i>	<i>NPR</i>	<i>SEC</i>	<i>(N)EE</i>	<i>CES</i>	<i>NH</i>	<i>OW</i>	<i>CL</i>	<i>TE</i>
昭和 23	N/A	*	*	*	*	*	*	*	*
昭和 25	[ə:]	*	*	*	*	*	*	*	*
昭和 26	[ə:]	*	*	*	*	*	*	*	*
昭和 28	-	*	*	[ə:]	*	*	*	*	*
昭和 30	[ə:]	*	*	-	*	*	*	*	*
昭和 31	-	*	*	[ə:]	*	*	*	*	*
昭和 36	-	[ə:]	*	[ə:]	[ə:]	*	*	*	*
昭和 40	[ə:r]	[ə:r]	*	[ə:]	[ə:]	[ə:]	*	*	*
昭和 43	*	[ə:r]	*	[ə:r]	[ə:]	[ə:]	*	*	*
昭和 46	*	[ə:r]	*	[ə:r]	[ə:r]	[ə:]	*	*	*
昭和 49	*	[ə:r]	*	[ə:r]	[ə:r]	[ə:]	*	*	*
昭和 52	*	[ə:r]	*	[ə:r]	[ə:]	[ə:]	*	*	*
昭和 55	*	[ə:r]	*	[ə:r]	[ə:]	[ə:]	*	*	*
昭和 58	*	[ə:r]	*	[ə:r]	[ə:]	[ə:]	*	*	*
昭和 61	*	*	[ə:r]	[ə:r]	[ə:]	[ə:]	[ə:r]	*	*
平成 元	*	*	[ə:r]	[ə:r]	[ə:]	[ə:]	[ə:r]	*	*
平成 4	*	*	[ə:r]	[ə:r]	[ə:]	[ə:]	[ə:r]	[ə:]	*
平成 8	*	*	[ə:r]	[ə:r]	[ə:]	[ə:r]	[ə:r]	[ə:r]	[ə:r]
平成 13	*	*	[ə:r]	*	[ə:]	[ə:r]	[ə:r]	[ə:r]	[ə:r]
平成 17	*	*	[ə:r]	*	[ə:]	[ə:r]	[ə:r]	[ə:r]	[ə:r]
平成 23	*	*	[ə:r]	*	[ə:r]	[ə:r]	[ə:r]	[ə:r]	[ə:r]

表3 強勢のある ir/ur/er の発音表記 (例 bird/nurse/service)

まずそり舌接近音 [r] 表記の有無に関して、それに先立つ長母音 [ɑ:], [ɔ:], [ə:] いずれとの組み合わせにおいても一貫性が見て取れる。すなわち、ある特定年度の検定教科書において、強勢のある ar の表記が [ɑ:r] の GA 式であるならば、残り2つの強勢長母音もそれぞれ GA 式の [ɔ:r]、[ə:r] を採用している。次に、上の3つの表を [r] 音の有無に応じて +[r]/-[r] それから RP/GA という指標で示したのが表4・5である (便宜上表5については RP を網掛けで表示している)。

教科書名 検定年	<i>J&B</i>	<i>NPR</i>	<i>SEC</i>	<i>(N)EE</i>	<i>CES</i>	<i>NH</i>	<i>OW</i>	<i>CL</i>	<i>TE</i>
昭和 23	N/A	*	*	*	*	*	*	*	*
昭和 25	-[r]	*	*	*	*	*	*	*	*
昭和 26	-[r]	*	*	*	*	*	*	*	*
昭和 28	-	*	*	-[r]	*	*	*	*	*
昭和 30	-[r]	*	*	-	*	*	*	*	*
昭和 31	-	*	*	-[r]	*	*	*	*	*
昭和 36	-	-[r]	*	-[r]	-[r]	*	*	*	*
昭和 40	+ [r]	+ [r]	*	-[r]	-[r]	-[r]	*	*	*
昭和 43	*	+ [r]	*	+ [r]	-[r]	-[r]	*	*	*
昭和 46	*	+ [r]	*	+ [r]	+ [r]	-[r]	*	*	*
昭和 49	*	+ [r]	*	+ [r]	+ [r]	-[r]	*	*	*
昭和 52	*	+ [r]	*	+ [r]	-[r]	-[r]	*	*	*
昭和 55	*	+ [r]	*	+ [r]	-[r]	-[r]	*	*	*
昭和 58	*	+ [r]	*	+ [r]	-[r]	-[r]	*	*	*
昭和 61	*	*	+ [r]	+ [r]	-[r]	-[r]	+ [r]	*	*
平成 元	*	*	+ [r]	+ [r]	-[r]	-[r]	+ [r]	*	*
平成 4	*	*	+ [r]	+ [r]	-[r]	-[r]	+ [r]	+ [r]/-[r]	*
平成 8	*	*	+ [r]	+ [r]	-[r]	+ [r]	+ [r]	+ [r]	+ [r]
平成 13	*	*	+ [r]	*	-[r]	+ [r]	+ [r]	+ [r]	+ [r]
平成 17	*	*	+ [r]	*	-[r]	+ [r]	+ [r]	+ [r]	+ [r]
平成 23	*	*	+ [r]	*	+ [r]	+ [r]	+ [r]	+ [r]	+ [r]

表4 巻き舌 [r] の有無

教科書名 検定年	<i>J&B</i>	<i>NPR</i>	<i>SEC</i>	<i>(N)EE</i>	<i>CES</i>	<i>NH</i>	<i>OW</i>	<i>CL</i>	<i>TE</i>
昭和 23	N/A	*	*	*	*	*	*	*	*
昭和 25	RP	*	*	*	*	*	*	*	*
昭和 26	RP	*	*	*	*	*	*	*	*
昭和 28	RP	*	*	RP	*	*	*	*	*
昭和 30	RP	*	*	-	*	*	*	*	*

昭和 31	-	*	*	RP	*	*	*	*	*
昭和 36	-	RP	*	RP	RP	*	*	*	*
昭和 40	GA	GA	*	RP	RP	RP	*	*	*
昭和 43	*	GA	*	GA	RP	RP	*	*	*
昭和 46	*	GA	*	GA	GA	RP	*	*	*
昭和 49	*	GA	*	GA	GA	RP	*	*	*
昭和 52	*	GA	*	GA	RP	RP	*	*	*
昭和 55	*	GA	*	GA	RP	RP	*	*	*
昭和 58	*	GA	*	GA	RP	RP	*	*	*
昭和 61	*	*	GA	GA	RP	RP	GA	*	*
平成 元	*	*	GA	GA	RP	RP	GA	*	*
平成 4	*	*	GA	GA	RP	RP	GA	GA/RP	*
平成 8	*	*	GA	GA	RP	GA	GA	GA	GA
平成 13	*	*	GA	*	RP	GA	GA	GA	GA
平成 17	*	*	GA	*	RP	GA	GA	GA	GA
平成 23	*	*	GA	*	GA	GA	GA	GA	GA

表5 RP と GA の分布

以上の調査からまず明らかになったのは、今回の調査対象とした検定教科書に関する限りにおいては、GA 式のそり舌接近音 [ɹ] の表記が初めて登場するのに戦後20年もの期間を要しているという事実である。昭和40年度の検定でその先端を切ったのは開隆堂から出版された *Standard Jack and Betty* と *New Prince Readers* であったが、アメリカの文化・社会を戦後どの検定教科書にも先駆けて描き続けてきていた *Jack and Betty* シリーズでさえ、発音表記に関しては戦前のイギリス一辺倒の束縛から逃れるのは容易なことではなかったことを物語っている⁸。その次の検定年度では、開隆堂に加えて中教出版発行の *Everyday English* シリーズも GA 式に転換し、この2出版社においてはそれ以降発行した教科書すべてにおいてこの方式で通している。また、昭和61年以降に順次新たに参入してきた教育出版、光村図書、学校図書の各出版社も最初から GA 式採用で一貫している。

むしろこのテーマに沿って観察した場合、興味深いのは三省堂の *Junior Crown* シリーズでの表記法式的変遷であろう。このシリーズは昭和36年度の検定より三省堂が新たに投入したリーダーであり、第1課から一般動詞 have を導入する一方 be 動詞導入は17課から、などそれ以前の教科書にはないユニークな構成で話題を呼んだ。またアメリカ英語も強く意識した内容になっており、例えば have が所有を表す場合はそれ以前の教科書であまねく採用されてきたイギリス

英語式 Have you …? ではなくアメリカ英語式 Do you have …? で表現している。その一方で、そり舌音を含む発音表記に関しては従来からの伝統を受け継いだ RP 式に基づくものとなっており、この RP に準拠した表記法を現行の検定教科書のなかでも *Junior Crown* シリーズが一番最近（平成17年度）まで維持しているのは注目される。さらに、これも上表で示されているように昭和40年代に一時的ではあるにせよ GA 式に移行した事実は他の出版社には観察されない事例としてさらに興味深い⁹。いずれにせよ、この *Junior Crown* シリーズの最新の検定教科書（平成23年度）にて GA 式の [r] が採用されたことで、戦後65年以上経過してようやく検定教科書すべてにおいて GA 式による発音表記統一の完成を見るに至るのである。

おわりに

本論では第2次世界大戦以降に発行されてきた中学校英語検定教科書の発音表記法の変遷を辿ることで、我が国の英語教育におけるイギリス英語とアメリカ英語の位置づけの通時的変化を考察してきた。戦後にわかに沸き起こったアメリカ英語ブームはほどなくして教育現場にも押し寄せ、戦前までのイギリス英語一辺倒時代を塗り替えてしまう勢いであった。しかし、教育の基盤ともいえる検定教科書ではその転換が急速に進行したわけではなく、むしろ教科書出版社間で互いの動向を注視しながら慎重にその移行が進んでいったことが窺えた。今後は、膨大な数に上る戦前の検定教科書にも調査の範囲を広げていき、明治時代初期から現在まで綿々と続く日本の英語教育における両変種の位置づけの変遷をさらに詳しく調査していくことにしたい。

注

- 1 1872（明治5）年に駐米代理公使だった森有礼が日本語廃止・英語国語化論を唱えたのもこのような時代背景があつたことである（伊村 2003：263）。
- 2 なかでも1945（昭和20）年に発売された『日米会話手帳』はわずか3か月で360万部を売りつくすベストセラーとなった。
- 3 稲村（1986：213 ff.）によると、*Jack and Betty* の編集において GA 特有の [母音+r] 音を認識はしつつも、表記の上では無視して従来通りの RP に基礎を置くジョンソンズ方式を採用したと述べている。一方で、RP と GA を差異化する発音上の特徴として取り上げられることが多い「開いた a」（broad a）と「平舌の a」（flat a）の対比については、*Jack and Betty* シリーズでは発音表記を開始した1950（昭和25）年度検定以降、*New*、*Revised*、*Standard* すべての版を通して GA・RP 式の順番で発音を併記する方法をとっている（例 ask [æsk]/[ɑ:sk]）。
- 4 そり舌接近音を [r] のようにイタリック体で表記することについて、稲村（1986：228）は「発音しなくてもよい音をイタリックで示す」と説明しており、GA と RP 式の発音を併記する手間を省ける利点がある。
- 5 1949（昭和24）年に発行された中学校用検定英語教科書5種のうち、*Tsuda New Reader* と *The*

Gate to the World の2種でジョーンズ式 IPA の発音表記が使用されているが、両者ともそり舌接近音のない RP 式を採用している。

- 6 1952 (昭和27年) に文部省より発行された、学習指導要領の改訂版ともいべき「中学校・高等学校学習指導要領外国語科英語編〔試案〕」では、イギリス英語とアメリカ英語との間の発音の相違が存在することを認めたとうえで、いずれの発音を習熟するかについて優劣をつけることはしないという見解を示している。この見解が、「学習指導要領 英語編〔試案〕」で示されたアメリカ英語式発音の優先的習得の方針とどのような形で相対したのか、また両者の見解の相違が教育現場でどのように受け止められたのかについては今後の研究課題としたい。
- 7 *Jack and Betty*, *New Prince Reader*, *Sunshine English Course* については、それぞれ単独では10回未満の検定回数ではあるものの、いずれも同一出版社の開隆堂から出版されてきていること、それから *Jack and Betty* をはじめとするそれぞれのシリーズの採択率の高さを考慮して本論ではその調査対象に入れた。一方、三省堂に関しては *New Crown* シリーズ以前の教科書 (*The New Vista English Readers*, *New Tsuda Readers*, *English Class Today*, *The Sun English Readers*) はいずれも検定回数が3回以下と少なく、本調査の目的に必ずしも合致しないと判断して対象から除外した。
- 8 *Jack and Betty* シリーズでの発音表記に関する編集者の苦心ぶりについては稲松 (1986: 213-220) に詳しいが、特に現場の教師が両方式の狭間で混乱することがないように配慮したという述懐は興味深い。
- 9 その理由の一つとして考えられるのは著作者の交代である。例えば、昭和49年度と52年度の検定にかけては著作者が「中島文雄・宮内秀雄ほか10名」から「中村敬・若林俊輔ほか9名」へと大幅な入れ替えがなされている。このことは教科書の記述内容を出版社の方針という観点のみから分析を試みることの不十分さを示しており、本テーマに対するより多角的な視点での考察が今後必要になってくるものと考えられる。

参考文献

- 朝日新聞社編『「日米会話手帳」はなぜ売れたか』(朝日文庫, 1995)
- 稲村松雄『教科書中心昭和英語教育史』(開隆堂, 1986)
- 伊村元道・若林俊輔『英語教育の歩み: 変遷と明日への提言』(英語教育シリーズ4) (中教出版, 1980)
- 伊村元道『パーマーと日本の英語教育』(大修館書店, 1997)
- 伊村元道『日本の英語教育200年』(大修館書店, 2003)
- 江利川春雄「英語教科書の50年」『英語教育 Fifty』pp.27-36 (大修館書店, 2002)
- 江利川春雄『近代日本の英語科教育史』(東信堂, 2006)
- 江利川春雄『日本人は英語をどう学んできたか』(研究社, 2008)
- 大村喜吉・高梨健吉・出来成訓編「英語教育課程の変遷」(『英語教育史資料第1巻』(東京法令出版,

1980)

大村喜吉・高梨健吉・出来成訓編「英語教科書の変遷」(『英語教育史資料第3巻』(東京法令出版, 1980)

斎藤 兆史著『日本人と英語：もうひとつの英語百年史』(研究社, 2007)

高梨健吉・大村喜吉著『日本の英語教育史』(大修館書店, 1985)

高梨健吉『日本英学史考』(東京法令出版, 1996)

竹林滋他著『アメリカ英語概説』(大修館書店, 1988)

田中春美・田中幸子編『World Englishes 世界英語への招待』(昭和堂, 2012)

出来成訓著『日本英語教育史考』(東京法令出版, 1994)

寺沢拓敬『「なんで英語やるの？」の戦後史』(研究社, 2014)

中村紀久二編『教科書の編纂・発行等教科書制度の変遷に関する調査研究』(平成7年度～平成8年度科学
学研究費補助金(基盤研究B(1))研究成果報告書, 1997)

日本の英学100年編集部『日本の英学100年』全4巻(明治編、大正編、昭和編、別巻)研究社(1968～
1969)

晴山陽一『英語ベストセラー本の研究』(幻冬舎新書, 2008)

南 精一「発音記号の日本への移入史」『日本英語教育史研究』第2号 pp. 1-16(日本英語教育史学会,
1987)

(まつざき とおる：英語学科 准教授)

